

# 柏祐賢の比較経済秩序論における中国経済・「東亜」観<sup>1</sup>

## Kashiwa Sukekata's View on Chinese Economy and "East-Asia" in his Theory on Comparative Economic Orders

四方田雅史

文化政策学部 文化政策学科

Masafumi YOMODA

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本論文は、主に農業や戦前中国の経済秩序を研究した農学者兼経済学者の柏祐賢の経済思想を、当時の経済学や思想の観点から位置づけることを目的とする。博士論文や一連の著作で、柏はドイツ歴史学派やマルクス主義に代表される発展段階論を当時の中国における実証研究の成果から批判するとともに、各国の経済秩序にはその発展段階に還元できない「個性」があることを示そうとした。そしてその「個性」こそ「大東亜共栄圏」の経済政策を考える際に重視されるべきだと主張した。このように彼の考え方には文化相対主義に近い観点を読み取ることができるが、他方で彼は経済学者であったがゆえに、それぞれの経済秩序を経済的豊かさや世界資本主義からの距離という一元的尺度によって序列化する思考もあわせもっていた。くわえて本稿は、このような柏の中国観・「東亜」観に柏が敬愛した西田幾多郎からの影響が強かったことも論じる。

This paper focuses upon economic thought of Kashiwa Sukekata, an economist who mainly made research on agriculture and prewar Chinese economic "order". In his doctoral dissertation and various books, he criticized validity of the development stage theory including the German historical school and the Marxist theory. Instead, he insisted that economic orders of various countries respectively had different characteristics ("kosei") not ascribed just to difference in linearly developmental stages through his field study in North China. He also insisted that the differences in the characteristics should be taken into account for the regional integration under Japanese military rule during the Sino-Japanese War (1937-1945). Although he had a similar viewpoint as cultural relativism, the respective economic orders were partially ranked as more or less developed according to the criteria such as economic affluence and poverty, for his fate as a contemporary economist. This paper also discusses how largely Nishida Kitaro's philosophy influenced Kashiwa's way of thinking about China and "East Asia".

### はじめに

柏祐賢<sup>すけかた</sup>(1907-2007)と聞いても、一般でも学界でも、現在知名度は高くないのではないかと。一般には農学者としての顔、もしくは若かりし頃の中国農村研究者としての顔があり、また台湾民主化の父である李登輝元大統領の恩師としての顔も持っている。しかし、彼の学説を学説史全体に位置づける研究は、『柏祐賢著作集』(以下『著作集』)が1980年代後半に刊行された際に執筆された論考群を除くと、ほとんどないと言ってよい。

もちろん、近年、原田(2011, 2014)、加藤(2010, 2013)、杉岡(2014)のように、柏の戦中・戦後の中国経済や農学に関する成果を、現代の文脈に置いて再評価しようとする動きが一部にはある。しかし、そのこと自体、近年の中国研究への応用であったり、自然科学と社会科学の中間に位置する農学の可能性に対する指摘であったりを目的としている。振り返ってみれば、柏の学説は、戦後長い間、主流の経済学や地域研究において忘却、等閑視されてきた存在とも言える。この点については、『著作集』刊行当時における経済学史家・小林昇の見立てが参考になる。彼によれば、柏の学説・研究が重視されなかった要因として、

(1) 戦時下の中国研究が戦争目的のしもべとされたことから、この研究自体が不信の目で見られたこと、(2) 中国に関する社会科学的研究は、小国になった日本の学界にその余裕がなくなったこと、(3) 進歩的学者の多くがその隠れ蓑だった中国研究を放棄したこと、(4) 「戦後」の学界におけるマルクス主義の支配は、社会科学者の関心を中国の政治革命に集中させ、しかもこのばあい不当に、経済が政治(革命)を制約するはずだという認識を忘れさせてしまったこと、の4つを挙げている(小林1986: 144-145)。これらは、柏が学界の主流から等閑視された背景として首肯できる<sup>2</sup>。そのうち、戦後ある時期までは妥当していた(2)や(4)は現在様変わりしており、そのような変化が、先述したような柏学説の再評価につながっていよう。

近現代の日本人はさまざまな視点から日本やアジアの歴史を解釈してきた。特に西洋から導入された「歴史学」の方法論から、西洋を基準とした準拠枠組みを日本やアジアの歴史解釈にも援用することが行われてきた。その傾向は、程度の差こそあれ、明治時代から戦後に至るまで続いている。しかし、日本と西洋の間に中国という中間項を入れると世界の歴史や社会はどう違って見えるのであろうか。特

<sup>1</sup> 本稿は山東師範大学で開催された「第5回日本学ハイエンド・フォーラム」(2017年9月16日)での拙報告「日本の社会学者は中国をどう見たか—柏祐賢の場合」を加筆修正したものである。

<sup>2</sup> 岸本(2006):283-284も柏『経済秩序個性論』に(マルクス流の)発展がないことを、当時の学界で等閑視された一因として指摘している。

に柏が独創的な思索をしていた1930～40年代は、日中戦争など日中関係にとって不幸な時代であったが、そのような国際情勢がかえって「直面する中国をどう位置づけたらよいか」という課題を、避けては通れないものとして当時の日本人に突き付けたのである。もちろん、それに対して日本人が出した答えにはいくつかのパターンがある。その概略を整理している梶谷（2016）は、当時の「支那統一化論争」における見解として（1）中国停滞論、（2）日本・中国協調論、実利の日中友好論、（3）下からの大衆運動擁護論、「新中国」との連帯論に大きく分けている。これら3つの見解は、それぞれ興味深い論点を提示しているが、当時の学界・論壇の動向をすべて汲みきれているわけではない。「中国をどう位置づけたらよいか」という問いに対する答えが多様であることこそ本稿の出発点であり、それを繙くために本稿で取り上げる対象が柏祐賢その人である。筆者から見て柏の学説は個性的であり、ある意味孤高の学説と言ってよい。それゆえに、先述した通り、戦後長い間異端の地位にあったといえる。しかし、戦後のさまざましながらみが変わってきた2000年代以降、柏学説へのまなざしが変わってきたのも当然かもしれない。

そのような問題意識をふまえて、本稿では2つの視点から柏の中国論・「東亜」論を位置づけることを目的とする。第一の視点は当然ながら中国の存在である。柏の研究全体を鳥瞰する際、戦時期の中国研究を抜きにしては語れないであろう。彼が中国研究に従事した昭和10年代、中国との関係を理解しそこから政策を構想することは喫緊の課題であった。彼自身回想で述べたように、中国を研究し理解するという課題は突然彼の眼前に現れたと言ってよい。その中国を何とか理解しようと努めた過程で、当時の社会科学に対する批判的視角も芽生えてきた。経済学を含む社会科学自体、西欧で生まれてきたことは周知のことに属すが、その中でアジア、彼の場合とりわけ中国をいかに理解し、その成果を社会科学全体にいかに包摂していくかは重要な課題であった。そして、中国をどう理解したらよいかという問いは、現代の我々とも共通しよう。ただし、柏自身、当時の政治状況の中で、中国への侵略、帝国主義に加担した面がなかったとも言えない。その点からみると、一筋縄ではいかない時代的制約がある。こうした制約を一方でとらえつつも、彼自身が中国をいかに捉え、そこから社会科学全体に何を投げかけようとしたのか。そのような問題意識が、彼を一方で社会科学の危機的状況から、他方で中国経済が世界の中で台頭しつつある現状から、再評価されるようになった契機とみることもできよう。

もう一つの視点として、本人も影響を受けたと頻りに述懐している西田哲学からの影響について議論を深めることである。柏にとって西田幾多郎（1870-1945）は学問上の恩師であった。彼の回想によると、西田の「場の理論」に触れたうえで、「西田先生のいろんな所説を、ただ自分の分野で生かしてみた、これだけのことだろうな」（柏1971:149）と総括している。すなわち、西田の思想・学説を自分の分野、つまり経済学・経済秩序論に適用した

にすぎないという強い自覚があったのである。『著作集』刊行当時に、柏の学説と西田哲学との関係を論じた植田（1990?）が、それぞれの弁証法的思考様式の共通点について論じようとしている。しかし、それだけではなく、西田から受けた影響、西田との共通性は他の領域においても陰に陽に散見されるとみてよい。本稿では特に当時の中国、そして日中を含んだ「東亜」をめぐる思考から、柏と後期西田哲学との近さについて検討してみたい。以下で明らかにするように、戦時期の「後期西田哲学」は、一方で侵略に加担したと非難されることもあるが、他方で西田が西洋哲学を乗り越え世界の多様性についての独自の哲学を構築しようとしていたために、柏の問題意識と共鳴した可能性がある。戦前・戦時期のアジアの捉え方について、西田と柏の間にいかなる類縁性があるのか、浮き彫りにしたい。このように密接に関連するこれら2つの視点から、柏祐賢の中国観、「東亜」観を位置づけることが本稿の課題である。

## 1. 中国でのフィールドワークと柏学説の展開

柏の中国でのフィールドワークは、自ら希望して行ったものではない。彼は1939年に京都帝国大学人文科学研究所に移籍したが、そのときから中国研究に携わるようになり、そこで研究課題として「日満支農業調整」、すなわち日本・満洲・中国の農業政策の問題を与えられたと回想している（柏1971:103）。中国語習得もそれを機に始めており、彼が自ら意図して行ったわけではなく、偶然の産物であったことが読み取れる。現にそれ以前の論文を繙くと、ほとんど日本の財政や農政に関する論考であり、柏独自の学説というより、当時としてはオーソドックスなものである<sup>3</sup>。その意味で、彼の独自性は、中国研究と並行して深化していったと考えられる。

彼の中国研究は最終的に博士論文『経済秩序個性論』（1947-48年刊、以下『個性』）として結実していくことになるが、その前にその成果の一部を『北支の農村経済社会：その構造と展開』（1944年刊、以下『北支』）という書として世に問うている。この冒頭で華北の経済社会について以下のような私見を披瀝している。

「支那経済社会をば直ちにヨーロッパ諸国の経済社会に対比し、単にその発展段階の著しく遅れたものであるとして理解せんとし、或はまた封建的ないし半封建的社会というのが如き概念を以て、充分にこれを覆い得るものであるかの如く論じ、かかる視野から調査し、研究しきつた如き、即ちこれ（実情が著しく歪められて報告されてきたこと：引用者）である。」（『著作集』2：3）

これは柏の今後の学問における展開を考える上で重要な指摘である。当時、中国や日本を「半封建」的な社会とみなし、西洋の資本主義と比べ、それとの違いを「遅れ」として抽出する考えが一方で存在していた。日本ではマルクス主義に与した「講座派」と呼ばれる一連の論者がそう

<sup>3</sup> たとえば「租税負担より見たる都市と農村」『京都帝国大学農学部農林経済研究室パンフレット』第39号、1936年や『帝国農会報』所収の「農業救済政策治下のアメリカ」1934年11月、「地方自治制度と財政調整交付金」1935年7月、「農林財政と都市財政との性格的相違」1936年3月など。

であるし、中国においても同様の論争（「中国社会性質論戦」、「中国社会史論戦」、「中国農村性質論戦」）が展開され、中国社会について講座派とほぼ同じ論が主張された。日本資本主義論争の観点で中国の経済・社会に適用しようとする南満洲鉄道調査部グループもあった。いずれも途上国であった日本・中国の社会を西洋の準拠枠組み（この場合にはマルクス主義）から判断して、それからのズレ、ゆがみを「半封建」とみなす思考様式である。

それに対し、柏はこの見解に与さなかった。こうした柏の論は当時の橘樸や戒能通孝らの論考とも通底する。それが影響してか、彼の著作には橘や戒能の研究がしばしば引用され、しかも柏の持論を補強するための証拠になっている。これらは、日本と中国の経済社会の特徴を西洋の枠組みに押し込めて理解しようとする主流の立場から訣別しようとしていたことを意味する。

実際、彼の眼からみると、当時の中国経済は西洋の経済史の枠組みからは捉えられないという発見があった。たとえば「封建」概念は多義性があるため、解釈がなかなか難しい。もともと「封建」は周王朝に由来することは知られている。しかし、そこに西洋のfeudalismの訳語としての意味が付加され、中世日本の社会にも適用された。もちろん、それらの間に意味の異同が存在するが、ここでいう「封建」「半封建」とは西洋史に基づく概念である。少なくとも柏の理解では、封建制とは身分的拘束がある社会であり、そこに商品経済が浸透することによって封建社会は資本主義に道を譲るという西洋の展開のあり方が前提となっている。しかし、中国はこのような発展段階から見ると、発展のあり方が逆転しており、少なくともその通りには理解することができないという直観に達している。その点については以下の文章を引用しておこう。

「地主は土地を提供し、小作人はその代償として労働を提供すると言うが如き関係には必ずしも立たない。従ってこのような二面に於けるそれぞれの給付関係は截然と區別せられ、身分的な拘束関係等には結びついていない。支那社会は明確に経済的自由契約経済社会であるように思われる。…（中略）…北支の農村社会は普通考えられているが如くに、身分的な上下拘束関係のある封建的類似の社会ではないのである。」（『著作集』2：77-78）

この中国経済が有している西洋とのズレや乖離を「半封建」的なものとみなす見解からは距離を置いており、それが前提としているマルクス主義や歴史学派にも批判的な姿勢をみせる。特に歴史学派への批判は舌鋒鋭い。歴史学派の主要な論者をいちいち取り上げ批判している。たとえば西洋経済史の成果に立脚して、自給自足から貨幣経済への発展段階論を主張する学説がある<sup>4</sup>。華北農村に関するフィールドワークの結果はこれを完全に裏切っているように見えた。柏が発見したのは、貧しい農民こそ、自給自足に閉じこもって生活していたのではなく、市場販売と自給自足を柔軟に変化させていく（柏の言葉を使えば「貨幣経

済化」していた）経済主体であったことである。通常貧困に喘いでいた（「発展段階の低い」という意も重ねられている）農民は、自給自足的生産を主としていたと考えがちである。にもかかわらず、現実はその逆であった。むしろ富農のほうが労働者を雇用しつつ食糧を自給し、自給自足に閉じこもる傾向を見出したのである。その発見をまとめた柏の言葉を引用しよう。

「資本主義的企業的 spirit のないところの、然しながら極めて合理主義的な経済精神（勘定高いと言う意味に於て）に富んだところの貨幣経済社会が支那農村経済社会の実態である…（中略）…北支農村経済社会が極めて貨幣経済化していながら、なお、極めて長く千年にわたって停滞的であらざるを得なかった理由もまた、その貨幣経済化の地盤が零細貧小なる小農生産であり、決してそのうちから営利的企業的 spirit の發育し来るような地盤であり得なかったことに拠るものであると言わざるを得ない。」（『著作集』2：31）

この文章では、一方において「合理主義的」、「貨幣経済化」という一見すると先進的な特徴が中国社会で観察されるにもかかわらず、他方において停滞的であり、資本主義的ではないというこれまた一見すると矛盾した特徴を発見しているが、その点については次節で論じたい。いずれにせよ、華北社会に関して得たこうした知見は、中国が西洋と異なってみえる経済的違いを「半封建」と位置づけてしまふ議論に柏が満足できなかった一因となった。そして、こうした一連の事実をいかに把握するか考えたとき、西洋を基礎とした歴史学派や発展段階論では捉えきれないことを強烈に自覚することになったのである。

経済史学における西洋中心主義への違和感は『個性』でもはっきりと述べている。というより、『北支』以上に鮮明に述べられている。おそらく柏の見解が成熟してきた証しであろう。彼によれば、経済史などで一般に見られる「ヨーロッパ社会に一般を見、中国社会をばまったくヨーロッパ社会の中国版として見る立場」は「ヨーロッパ的世界の秩序を人間社会存在として典型的なものと考える立場」であり（『著作集』4：16）、この考え方は、「中国社会の後進性を浮彫りにするのであり、したがって中国社会蔑視となり易い。しかして中国社会を指導的に率いなければならぬ使命を持つものとしてのヨーロッパ社会を考える態度となり易い」（『著作集』4：17-18）と論断している。これは、うがった見方をすれば西洋中心主義の変種である当時の「日本中心主義」的な見方への批判とも読めるが、少なくとも西洋中心主義、西洋帝国主義批判として踏み込んだ批判になっている。

先述した通り、彼は『北支』において華北をフィールドとした研究を世に問うている。華北のみをベースとした研究では、乾燥した気候、黄土高原という土壌、乾地農法（dry farming）や二年三作の農耕といった共通性を基礎とする比較的均質な地域であった。そこでは、華北の経済

<sup>4</sup> これに近い経済発展段階論としては、B・ヒルデブランド（1812-1878）が提唱した<自然（実物）経済Naturwirtschaft→貨幣経済Geldwirtschaft→信用経済Kreditwirtschaft>が挙げられよう。

秩序は風土が決めていると言えなくもない。風土が社会を決めるといふとき、日本人ならば和辻哲郎『風土』を想起させよう。西洋と中国が共通の基盤を持たないとすれば、違いを風土の違いに還元する議論である。和辻によれば「牧畜」的な西洋社会と中国社会が性格を異にするのは、両地域が気候・風土を異にするからというのが一種の「風土決定論」、それが強ければ「風土影響論」と言える。柏が華北のみを観察していたら、このような論に収束しても不思議ではない。

しかし、彼自身、代表的な概念である「包」的律動のインスピレーションを得たのは、1944年の蒙疆調査のときであったと述懐している（柏1971: 110-111）。すなわち、中国は気候も風土も多様である中で、それを束ねている経済秩序というものがあることに考え至ったのである。風土が主因となってそれに固有の秩序ができてくるのであれば、モンゴル、華北、華中・華南では、気候や風土が異なるために、異なった秩序が出てくることになってしまう。また、回想において、地域を移動して出身地の秩序を他地域に持ち込む事例も紹介している（『著作集』13: 114）。ロシア人は「満洲」（ロマノフカ村）でロシアの習慣を持ち込み<sup>5</sup>、他方日本人は同じく「満洲」で日本の習慣を持ち込んでいたという発見である。もちろん、気候・風土が秩序の型を決める一因たることは否定していないものの、そのような多様な風土、そして多様な出身地にもかかわらず、それぞれの国民の経済行動を規定している共通項は何かという問いに到達するのである。

現在、柏祐賢を知る者であれば「包」的律動（「包」的秩序）をすぐ想起するように、それは有名な概念となっている<sup>6</sup>。「包」とは、「人と人あるいは人と物とのあいだに第三の人が入りこんで、その取引を請け負うこと」であり、「包」的秩序は「人と人との間の仲介を基礎とする秩序であり、商業的な秩序である」と説明している（『著作集』3: 272-274）。逆に日本や華中・華南は風土・気候が似ているにもかかわらず、以下に見るように、なぜ秩序が異なったのかという問いにも答えなければならないことになる。逆に言えば、和辻のような風土決定論に代わる論理を打ち立てなければならないという産みの苦しみが始まったとも言える。残念ながら、それについては本稿の課題ではなく、別稿にゆだねなければならない。

少なくとも農学をベースとしながら経済学も修めた彼の経歴から見て、気候や風土などの違いも一因とした多様な「経済秩序」の発見には、農学の思考法が影響したと考えられる。たとえば稲作と小麦作の優劣や発展段階を論じても無意味であり、気候・土壌・風土や食文化などに規定されつつ一つの「秩序」を形成している。その間の優劣には

それほど意味がない。このように農学の思考法は経済学というより文化人類学に近いと言える<sup>7</sup>。確かに農学でも当時発展段階論的思考は根強く存在していたわけだが<sup>8</sup>、経済学に比べればその思考に陥る可能性は減殺されたと考えられる。

それでは、彼が間近で見ることができた日本経済と中国経済をどう見ていたのであろうか。当時、この2ヶ国を「東洋」「東亜」と一括して、一般に中国が遅れており日本が進んでいるという価値判断を入れつつ、議論されることが多かった。これは当時の識者に一般に見られた傾向であるし、橘も1930年代半ば以降、東洋を基礎とした発展段階論を展開し、日本を「東洋の盟主」とみなせるような考えを展開するようになった（四方田2014）。東洋と西洋を二項対立させる思考様式であり、当時「近代の超克」論でも広く採られたシェーマであった（廣松1989）。これは「大東亜戦争」を正当化する論理とも親和性があったし、気候・風土・漢字・儒教などの共通性を前提に、日本と中国などの「東洋」を一括する視点は当時、（そして現在に至るまで）説得力があった。

それに対して、柏はトライアングルの構図で考えていた。むしろ彼の論にはそれが前面に出ていってよい。つまり、〈西洋—日本—中国〉という三角形を考えるという視角であり、これらはともに特徴を異にする独自の「経済秩序」を持つという理解である。これは1920年代に橘が展開していた「自治」をめぐる西洋・日本・中国のトライアングルの理解と似ている。橘は西欧と中国には、別の意味ではあるが、高度な自治が発達しており、反面日本には弱いことを指摘し、一般に日本が発展しており中国が遅れているとする通説を自治の側面から逆転させている。このようなトライアングルの対比は「個性」でもあちこちで見られる。それは、彼の西洋・日本・中国の経済秩序の違いに関する言及において、そのことが如実に表れている部分として以下の文を引用しよう。

「中国的経済秩序は商業的律動を持つ秩序であり、ヨーロッパの経済秩序は工業的律動を持つ秩序であったのに対し、日本経済秩序は、農業的律動を持つ秩序であったといつてよいであろう。」（『著作集』3: 318）

このように、それぞれの国の特徴を示す喩えも巧妙であり、3つの国・地域がそれぞれ産業にたとえて対照的に映るよう考案されている。そこには、有名な「ペティークラークの法則」にあるような産業ごとの段階論、評価軸のようなものは直接的にはない。あくまでこれら3つの国がそれぞれ個性を持った存在であることを示す比喩として使

<sup>5</sup> 当時、ロマノフカ村は「満洲国」内のロシア人村（しかも分離派という少数派の信仰が維持されている村）としてブームとも呼べるほど知られていた。さまざまな研究者がこの村を訪問し、その状況を多くの本にまとめている。

<sup>6</sup> もちろん、それも先行研究の影響を受けていないとも言えない。中国研究における京都学派の祖とされる内藤湖南は、たとえば当時有名だった「新支那論」で元代頃から胥吏も商人も「請負構造」になっていると述べており、柏にそれを引用した形跡はないものの、それを読んでいたか、少なくとも誰かから聞いていた可能性はある。内藤（1924）: 277。

<sup>7</sup> 戦時期における中国農村調査の概説については田島（2006）がまとめている。これを見ると、華北特有の農法を遅れたものとみなさず、その意義を再発見するという側面があった。

<sup>8</sup> この点で、最近読んだ藤原（2017）は参考になった。トラクターの開発・普及という単線的な進化と、他方で土壌・農法・政治体制などの違いから単線的では捉えきれない複線的な進化との両面があったことを学んだ。

われている。

このような思考からは、「東洋の盟主」的、冗費的な日本の立場は出てきにくい<sup>9</sup>。むしろ『経済秩序個性論』というタイトルからも現れているように、日本と中国は互いに異なる秩序を持つ国であり、そこから導かれるのは発展段階のみが異なる地域を包摂した地域圏・文化圏としての「東亜」像ではないことになる。

さて、〈東洋－西洋〉という二項対立的な見解は多くの識者で共有されていたと述べたが、柏が敬愛していた西田幾多郎はいかに考えていたのであろうか。西田の文章はきわめて難波な言い回しであるため、筆者ははじめ哲学の訓練を受けていない身からすると真意がつかみにくいが、西田自身も柏に近い考えを持っていたのではないか。西田自身、東洋と西洋とを対比させた言説もいろいろな箇所で見られるが、他方で日本、中国、インドを例にして東洋を均質的な一枚岩とはみていない。そのため、西洋・日本・中国（東洋）の3つを対比させている文章も多い。その代表的なものを引用しよう。

「ヨーロッパは各民族が主体的でありながら、之を越えて一つの世界であつた。支那は周代以来既に一つの世界であつた。天下であつた。支那には民族として主体的といふ考は甚だ稀薄であつた。支那文化の内に包摂せられるかぎり、中国と考へられたのである。日本は何千年来東海の孤島に位して、縦の世界として発達した。主体即世界といふ文化形態を取つた。主体が多くの環境的否定を通さないで、自己否定的に世界となるといふ形式によつて発展し来つたのである。…（中略）…（日本は：引用者）そこに環境より主体へとして、環境的に形成せられたヨーロッパ的世界と、相反する両極に立つと考へることができる。」（『西田幾多郎全集』〔以下、『全集』〕9：58）

以上の引用によれば、西洋文化と中国文化はともに、縦（時間的）でありつつ「一つの世界」（空間的？）でもある文化と規定したのに対し、日本文化は「縦の世界」だと規定している。このあとで日本文化をいかに「世界的空間的」にするかという課題を、西田は提起している。ここには、橘と異なりながらも、日本・中国・西洋を俎上に載せ、他の2つと対比させる形で、日本文化の意義と限界を画する姿勢が見える。ここには、日本は中国より発展段階が高いわけではなく、「一」なるものがさまざまな形に分化し、そして「一」なる世界史にそれぞれ使命を帯びている〈西洋－日本－中国〉という理解が根底にある。そして、日本は島国であるため、「縦の」変化に終始した歴史があったとする一方、中国や西洋は多民族・多文化を包摂し、その違いを呑みこんできた、多様の中で一なるものを実現させてきた、さらに言い換えれば歴史性と空間性を同時に包摂してきた存在と規定する。そして、当時、日本が「東亜新秩序」などお題目を唱えているときに、これまで日本に欠如していた空間性をいかに獲得していくかという課題を指し示していたのである。それは、当時、日本を「東洋

の盟主」とみなし、日本文化や日本語を他地域に押し付ける現状への批判とも読み取れよう。

別の箇所では西田は、欧米世界が立脚するキリスト教、中華世界が立脚する王道、そして日本が立脚する「皇道」、もしくは「八紘一宇」を並列にして論じている（『全集』11：446）。もちろん、この〈キリスト教－皇道－王道〉という三極が、現代の私たちから見て妥当ではないと断じることが容易であるが、このような論理には、当時巷で強調されていた「皇道」を唯一絶対のものとするのではなく三極の1つに過ぎないという相対化の視点が含まれている。

その意味で、柏の採用したトライアングルの視点も、じゃんけんに喩えられるように、それぞれに優劣をつけにくい、少なくとも三すくみの状況を描写するのに優れた視点と言える。西田、柏ともに国家・民族（nation）を単位として議論している点で限界はあるものの、他方で各国・地域にはそれぞれ独自の歴史的使命（「多」）があり、それらが融合しながら「一」なる世界を形成していくという思想・意識があった点において共通している。

西田の「縦の世界」と「（横の）一つの世界」と抽象的、哲学的に述べていたことに近い論理は、柏の著作にも見られる。この西田の理解を経済的に実証した論として『個性』の中にある移民・植民論を取り上げたい。『個性』が1947－48年に公刊された際、このうち日本人移民・植民論の部分のみ削除され、中国と西洋の比較のみ残されたと言われている。敗戦後の状況から日本人移民を分析した部分を割愛すべきと判断したことは容易に想像されるどころだが、削除された日本人移民の記述をみると、西田の論旨と似ていることに気づかされる。以下はその引用である。

「華僑植民も、英国的投資植民も、かつては世界経済秩序に対して、その問題を解決し得るものとして、それぞれに著しく大なる貢献をなし得たのであった。しかし同時にそれぞれの限界をも明瞭に露呈している。…（中略）…われわれ（日本：引用者）は、その主体的自己形成を強く行い、その理念的形成を明確にし得る日には、また自からその対外的発展の相についても明示し得るであろう。」（『著作集』3：348－349）

英国・中国はともに、性格を異にするとはいえ、移民・植民を積極的に行い、世界経済に貢献した一方で、日本の場合国家に支えられた移民の形態をとったことが、日本の経済秩序の特徴を体現していると考えていた。そこでその移民政策を推進するために「満洲」に行こうとする移民を教育・訓練した加藤完治を称揚している<sup>10</sup>のは、この原稿が空襲におびえながら執筆していた時代背景を考えれば、やむを得ないこととも言える。いずれにせよ、彼が日本的な移民の特徴を当時の文脈から位置づけようとしており、「縦」の向きを持つと西田が考えた「日本文化」が、移民として横に広がろうとしたときに生じる課題を、柏も強く意識していたと言える。

<sup>9</sup> 彼に与えられた課題の「日滿支農業調整」を論ずる際にその主張に近いことを一部で言っているが、その点は次節で詳しく述べる。

<sup>10</sup> 「加藤完治らによって説かれた農業的精神主義の立場を正しいものとするべきであろう」（『著作集』3：321）といった記述がある。

以上のように、西田と柏が似た問題意識や思考を持っていた可能性を指摘したが、それについては時代的な背景があると考えられる。そこでもう少し広いスパンで論じておこう。周知の通り、第一次大戦で文明の名の下で惨劇が起きてしまった反省から、両大戦間期には西洋文明を無条件に礼賛する風潮は影をひそめた。日本でも、西洋の資本主義を批判するマルクス主義やクロポトキン<sup>11</sup>の思想がもてはやされたのも、こうした背景がある。特にクロポトキンの思想は、これまでの「適者生存」に基づいた社会ダーウィニズム的思考やそこで適者と言われてきた西洋自体を相対化し、文明の共存を図ろうとする上で、インパクトが大きかった。このあたりに西洋を相対化しようとする姿勢・思考が生まれていたことを意味し、それを助長したのが非西洋であった日本の経済的・軍事的な台頭でもあった。しかしながら、それはもろ刃の剣になる危険性があった。つまり、西洋中心主義を相対化する反面、その代わりに日本を据えてしまう日本中心主義に堕してしまう危険性も秘めていた。現にそのような思考様式が1930年代から40年代前半にかけて支配的になる。他方で、西洋の諸学問を学びきるとともに、それを換骨奪胎し相対化する、そしてその相対化した枠組みの中で日本やアジアをも位置づけようとする思考が細々ながら生まれようとしていた。そのような流れを共有していたのが、西田であり、柏であったのである。そのためか、特に柏からみて、西田の問題意識や思想には魅かれるものがあつたのであろう。そこには、日本中心主義にできるだけ堕することなく、日本をも相対化し、西洋・日本・中国などを対象に包摂しつつ相対化する姿勢を意識的に採ろうとしたことが窺われる。

発展段階論の観点から言い換えると、戦前・戦時期には、まずマルクス主義や歴史学派のように、直線的な発展上の段階の違いとしてそれぞれの国・地域の違いを規定しようとする学派が主流であった。それに対し、世界を西洋と東洋とに二分し、それぞれに異なる発展段階を規定する思考様式（学派とまで言えないが）も他方にあつた。ともに東洋に限れば、日本が先頭を走り、中国は遅れた存在と規定する点で共通していたが、後者は特に当時の「東亜新秩序」、「大東亜共栄圏」が唱えられていた時代には好都合な思考法であつたと言ってよい。それに対し、柏からみると、西洋・日本・中国はともに対照的な存在であり、上記のような思考は許されないものに映つた。その意味で、上記2つの思考を仮想敵としつつ、しかしこの違いを単なる違いとするだけではなく、ある共通性を持った中での違いとして規定しようとする。このあたりに見られる「一之多」、もしくは「多の一」に近い思考にも後期西田哲学からの影響が感じられる。しかし、次節で詳しく述べるように、柏自身経済学者でもあつたために、仮想敵とした上記2つの思考様式の影響から完全には逃れられなかったとも言える。このことを論じるためには、最後に柏が当時の「東亜」をいかに捉えたかを議論の俎上に載せる必要もあろう。次節では、現実の政策的課題として登場した「東亜」、もしくは「大東亜共栄圏」で否応なく進んだ強制的な地域統合を

いかに把握しようとしたのか、柏の言説をたどりながら見ていきたい。

## 2. 政策的課題としての「東亜」をめぐる一経済学者の宿命か？

以上述べてきたような「西洋—日本—中国」というトライアングルの構図、およびそれによって西洋や日本をも相対化しようとする観点は、古くはおそらく内藤湖南<sup>11</sup>、そして1920年代の橘樸、本稿で論じてきた柏祐賢に通底していよう。そこでは、西洋の発展段階論をそのまま適用するわけではなく、かといって「東洋」という地域を措定してその中での発展の遅速から序列化するものとも距離を置いていたといえる。この三者が依って立つ学問は、内藤がジャーナリズムを出発点とした文化論、橘が同じくジャーナリズムからの政治社会論、柏は農学を基礎とした経済学とそれぞれ異なっているが、他方で西洋を中心とする近代化論、発展段階論的な思考が各所に見え隠れしていることも事実である。まして経済学者の柏にとっては、上記のトライアングルの構図からこの三極が対等に位置づける点で一貫してはいなかったとも言える。その理由は、やはり当時の中国が貧しく近代化に取り残されているという現前としてあつた事実、どうしても向き合わざるを得なかったからである。

たとえば『北支』でも「貧困」の問題に言及している。彼は橘の「絶対的貧困」論に依拠しつつ、マルサス的な意味での人口過剰による「貧困」を問題視し、それが中国の属性だと述べている。そこでは、それぞれの依って立つ食糧の違いに言及しつつも、貧困の指標として、所有される土地や住民の穀物消費状況などを貧困の証拠としている（『著作集』2：310—327）。後者の穀物消費であれば、たとえばカロリーを一元的な指標として貧困をとらえることができる。そして、その貧しさゆえに賃金も安く、資本蓄積も容易に進まない現実を明らかにする。〈貧困—富裕〉という評価軸は、上記の三極を対等なものにせず、それらに序列化させる思考を内包させる。そこが、文化や政治制度のように多様な軸を基にした文化相対主義的な議論を許容し得ない背景になつていたと考えられる。

経済秩序に個性がある、さらに言ってしまうと、発展段階の違いや優劣に帰せられない「個性」の違いを抽出するという問題意識には、文化相対主義の先駆的な意図、つまり本人も意識していた西洋中心主義に対する批判や相対化という意図が込められていたと言ってよかろう。他方で、その秩序に対して評価を下そうとすると、序列化思考が入りこんでくることになる。たとえば以下の記述を引用しよう。

「ヨーロッパの経済秩序は、まさしく進歩＝矛盾の型の秩序である。中国の経済秩序が安定＝停滞の型の秩序であつたのに対して、まさしくその正反対の秩序であるといわねばならない。…（中略）…日本国民経済秩序は、安定＝進歩の秩序であつたといつてよい。」（『著作集』5：302, 324）

<sup>11</sup>たとえば山田（2010）。内藤の研究を現代の文脈から読み替える與那覇（2013）も参照。

ここでは3つの秩序の個性をそれぞれ先述のトライアングルの構図として特徴づけているのであるが、他方で「進歩—停滞」という序列が現れていると解釈することもできる。というよりも柏は経済学者であり、やはり経済学者の宿命として、経済成長、経済的な豊かさを是とする思考から抜け出すことはできなかつたし、抜け出してしまつては経済学の意義が失われてしまうとも言えるかもしれない。その点で、文化人類学で一世を風靡した文化相対主義的な議論や農学にある農業の多様性を認める議論と、経済学の思考様式との間には、根本のところでは相容れない部分があるということもできる。現在の比較制度分析(Comparative Institutional Analysis)、もしくはそこから派生した諸研究においても、非欧米に多様な制度があり得ることは認めるものの、結局のところ、それらに対する評価は経済発展・近代化の可能性・不可能性から欧米と非欧米の二分法に帰着させてしまう議論が多い<sup>12</sup>。これをもって経済学を批判するのはたやすい。しかしながら、柏が一方で経済秩序の相対化を試み、近代化の尺度のみからでは測りきれない「個性」を重視した論を展開したのに対し、他方で近代化や発展・成長を基準にして秩序間の評価を行っていることは、柏のみならず、経済学全体が背負っている宿命のようなものと言つていいのかもしれない。

そして、彼はそのような対等な三極という考えに飽き足らなかつたのか、彼の処女作『経済科学の構造』(以下『科学』)において抽出した「人」の類型を発展させる形で、資本主義それ自体の独自の段階論へと論を展開させていった。この『科学』は実証研究というよりも理論的研究であるが、柏の博士論文『個性』第1編に再録している、戦後も機会あるごとに取り上げてきた著作でもある。よつて、柏にとって思い入れのある著作であつたと考えられる。その理論的理解については本稿の範囲を超えてしまうため、別稿にゆだねなければならないが、柏は戦後、世界規模における資本主義の発展のあり方として「経営者→起業家→金融業者→公営体(後に共栄体、組合のようなもの意)」という発展段階論を提示している。世界の資本主義はある種の発展段階に沿つており、その中で各国・地域の個性的な経済秩序は、あるときはその世界資本主義に順応的にふるまえるものの、あるときはそれに順応できず発展し得ないケースもあることになる。柏は、後者の例として中国を挙げる。回想の中でも次のように述べている。

「そういうある環境において形成されている個性的な秩序が、ある発展の段階で非常に大きな役割をはたすんですよ」(柏1971:163)

こうして、各地域の経済秩序にそれぞれ個性があるとする一種の文化相対主義的議論と、他方でその三極のうち中国のみが当時近代化、世界的趨勢から取り残されているという事実を矛盾なく両立させる議論を展開しようとしたのである。しかし、そこに、橘と同様の時代的制約が伏在していたとみることもできる。橘は東洋に限定された形での

発展段階論を展開し、日本を「東洋の盟主」に位置づけていく議論に無意識のうちに移行していったが(四方田2014)、柏の場合にはさらに一筋縄にはいかない。彼自身、経済学者として「貧困」の問題を無視し得なかつたため、最終的に「西洋—日本—中国」を対等なものとして位置づけられず、それを貧困の程度や世界資本主義の趨勢からの距離を基にして、序列化していく論理が潜んでいたのである。そこに、日本を「東洋の盟主」とみなしていく論理を読み込むことも不可能なことではない。もちろん、そのことをもつて柏の議論がただちに遺棄されるべきものではないが、当時の時代的制約として指摘しておく必要があろう。

そもそも柏が中国研究に邁進した契機は、先述のとおり、「日滿支農業調整」に関する研究であつた。当初の目的から見たとき、彼の議論はその出発点からははるか遠くに離れてしまった。しかし、彼に与えられた当初の課題に対する答えはどのようなものであつたのか、その答えは「北支」に見られる。引用しよう。

「我々はかかる政策が零細貧小なる小農民(柏によれば、華北農村において経済的イノベーターの役割を担う主体と考えていた:引用者)の中に浸透して、如何ほどの効果を挙げ得るものであるかに就いても、若干の疑念を懐かないわけには行かないのであるが、然しその技術的効果は、その政策遂行が強力なる財政的援助と有効適切なる宣伝的処置とさえ伴うならば、充分期待せられてよいのではないかと思う。…(中略)…北支農業問題の今日の日程は、東亜細亜経済圏確立の見地に於て、緊急的に強力なる政策が遂行せられることであろう。今日のこの問題の解決のために課せられた使命は、かかつて我々にあることを思うべきである。」(『著作集』2:383)

「北支に於ける棉作の奨励と食糧及び飼料の安価容易なる供給とを含むところの一貫せる東亜細亜圏経済政策の確立と具体化こそ北支農業発展の最先決問題であり、基本的条件であること明らかである。」(『著作集』2:410-411)

彼の主張は、中国の貧困の問題を解決するために「東亜細亜(経済)圏」が運用されなければならないこと、そのためには中国の経済秩序の「個性」を活かした(もしくは念頭に入れた)形での経済ブロックでなければならないとまとめることができる。中国統治で考慮に入れなければならない「個性」の1つとして、柏が華北で観察したように、中国の貧農層のほうに富農より市場動向に柔軟に対応しつつ穀物と商業作物の生産を代替してきた前掲の事実を挙げる。すなわち、その「個性」ゆえに、そもそも貧しいにもかかわらず国際分業に組み込まれている華北の農民を日本主導でブロック経済へと組み込み、日本が積極的に商業作物たる綿花を買い取り、逆に不足する小麦や雑穀を供給していくことにより、華北の貧困問題を解決する政策を提起したのである。この提案では、「日滿支ブロック」を無条件に礼賛しているわけではなく、条件付きで容認していた

<sup>12</sup>たとえばGreif(2006);Kuran(2011);Acemoglu and Robinson(2012)

と言える。彼は、自身が考える理想の「東亜細亜圏」が可能かといえば、条件としているところから判断して、難しいと考えていたのかもしれない。逆にこのように主張した背景として、日本が中国の「個性」を無視し、単に日本の「個性」を押し付けようとする動きを目の当たりにしていたのではないか。

これは、やはり西田が指摘した先述の課題とも興味深い一致を見せている。西田は『世界秩序の新原理』の中で「各自自己を越えて一つの特異的世界を構成し、以て東亜民族の世界史的使命を遂行せなければならない」（『全集』11：446）と指摘している。それぞれの個性（「多」）がそれぞれ世界史的使命を帯び、「一」なる世界に統合されていく未来。これはやはり柏の異なる経済秩序を前提とした「東亜細亜圏」の目標に近いと言えよう。他方で西田は「東亜」を主導するのは日本しかいないとも述べている。そこに対等な国家連合という究極的理想と、他方で当時歴然として存在していた力の差という現実の間で、折衷的態度が見え隠れしていた。より広く言えば、理想主義と現実主義の古くて新しい問題も内在していたと言える。

西田と共有していたと思われる個性を活かした地域統合という理想は、敗戦後四半世紀経ってからの発言ではあるが、柏の中に戦後も一貫して受け継がれてきたことが窺える。そのことを示す文を引用しよう。

「今度はそれぞれの秩序がそれぞれにもっている個性的な意味の主体性をもって相互に相寄り、それぞれに機能を果たすようになる。そういう意味で世界全体が職分共同体となるであろう。」（柏1971：163）

この「職分共同体」とは、協同組合のようなものを介した共同体であり、柏が先述の世界資本主義の段階論から導いた結論である。このような「組合主義」的思考にも、彼が農学を基礎として学んでいたことが影響を及ぼしたと考えられる。このように柏が戦後吐露した同じ理想を戦前にも思い描いていたのか否か、実は確証となる言説は見当たらないものの、彼の『個性』での議論と当時の上からの東アジア統合という事態とを考えあわせるときに、必然的に導かれる結論であったのではないか。

先の引用文にあったように、それぞれの地域の経済秩序が持つ「個性」を尊重しつつ協力していくことが、理想の国際社会の条件であり、戦時下という環境では日本を「東洋の盟主」たらしめる条件とみなしていたと考えられよう。しかしながら、上からの強制的な「地域統合」と、柏、および西田が思い描いた各国の経済秩序の「個性」や「世界史的使命」を活かした形での地域統合とは相容れない部分が含まれていたこともまた確かであろう。そして、その『北支』が1944年に刊行されたことからみて、柏は既に日本の占領支配の限界をも見定めていたのかもしれない。結局、彼が主張したような中国の貧困を解消するブロック内分業は構築すらできずに、逆に貧困を助長しただけの「大東亜共栄圏」は刊行の翌年に瓦解したのである。

## むすびにかえて

このような時代的限界がありながらも、柏の議論が「東亜」内各地域の経済的個性を活かした形での分業、協力を意識していたことは確かであろう。ある意味、多様な秩序の個性を持った地域の間で統合していく未来を夢見ていたとも言える。それもやはり西田の理想・理念とつながりあっている。そのことに関連して、西田は京都大学の講義「日本文化の問題」で次のように述べている。

「東洋が発達して西洋がその内に入つて了<sup>しま</sup>ふのも又その逆でもない。又東洋と西洋とが全く離ればなれだと云ふのもなく、謂はば一つの木の二つの枝なのである。二つに分れて居るがその根柢に於て結びつき相補<sup>あひま</sup>ふのである。この一層深い根柢を見出さねば東洋と西洋とが一つになつた世界文化は考へられないのである。」（『全集』13：20）

しかし、逆にそれは日本の「個性」が内包している問題、西田の言葉を借りれば「日本文化の問題」がその途を阻害する危険性も意識していたのかもしれない。その意味で、「大東亜共栄圏」を礼賛する見方として発展が進んだ日本が遅れている中国や東南アジアを指導していくような西洋植民地主義の劣化コピーからは、柏と西田がともに距離を置いていたことは確かだが、上記のような理念が、現実の政治状況や当時主流の考え方に掠めとられる面も否定できず、柏の理念が絵に描いた餅にすぎなかったのもまた事実であった。

しかし、現代からみると、柏がどうしても見ざるを得なかった中国の「貧困」という問題が、かつてほど重要性がなくなり、柏が見たトライアングルの思考、そして異なる経済秩序を自覚しつつ互いに協力していくという理想が、現在ほど重要になっている時代もないのではないか。そう考えると、近年見られる柏学説の再評価もむべなるかなと言えるし、柏が残した宿題は現在の我々が答えなければならない問題と位置づけることもできよう。

## <参考文献>

- 植田良一（1990?）「柏学説と西田哲学とのかかわり」（『著作集』25、補巻V、110-113頁所収）。
- 梶谷懐（2016）『日本と中国経済：相互交流と衝突の一〇〇年』ちくま新書。
- 柏祐賢（1971）『柏祐賢教授 史観をめぐる四十年』未来社。
- 加藤弘之（2010）『移行期中国の経済制度と「包」の倫理規律』（中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』ミネルヴァ書房所収）。
- 加藤弘之（2013）『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』NTT出版。
- 岸本美緒（2006）『中国中間団体論の系譜』（岸本美緒編『「帝国」日本の学知：東洋学の磁場』岩波書店所収）。
- 小林昇（1986）『剛直山系』（柏祐賢著作集編集委員会編『学と人 柏祐賢教授の歩み』京都産業大学出版会、1988年、142-146頁所収）。
- 杉岡良彦（2014）『哲学としての医学概論：方法論・人間観・スピリチュアリティ』春秋社。
- 田島俊雄（2006）『農業・農村調査の系譜：北京大学農村経済研究所と「済民要術」研究』（末廣昭編『「帝国」日本の学知：地域研究としてのアジア』岩波書店所収）。
- 内藤湖南（1924）『新支那論』（内藤湖南『支那論』文藝春秋、2013年刊所収）。
- 原田忠直（2011）『柏史観と「包」的倫理規律』（『日本福祉大学経済論集』第43号所収）。
- 原田忠直（2014）『現代中国における「包」と発展のシエマについての一考察』（愛知大学国際中国学研究センター編『中国社会の基層変化と日中関係の変容』日本評論社所収）。



廣松渉（1989）『＜近代の超克＞論：昭和思想史への一視角』講談社学術文庫。

藤原辰史（2017）『トラクターの世界史：人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』中公新書。

山田伸吾（2010）「内藤湖南とレヴィ=ストロース：西欧世界の相対化という視点からの素描」（河合文化教育研究所編『研究論集』第8号所収）。

與那覇潤（2013）「史学の黙示録：『新支那論』ノート」（山田智・黒川みどり共編『内藤湖南とアジア認識：日本近代思想史からみる』勉誠出版所収）。

四方田雅史（2014）「橘樸の社会経済思想：『封建』概念と発展段階説に関する見解をめぐって」（『日本経済思想史研究』第14号所収）。

Acemoglu, Daron and James A. Robinson (2012) *Why Nations Fail: The Origins of Power, Prosperity, and Poverty*, Crown Publishing Group.

Greif, Avner (2006) *Institutions and the Path to the Modern Economy: Lessons from Medieval Trade*, Cambridge University Press.

Kuran, Timur (2011) *The Long Divergence: How Islam Law Held Back the Middle East*, Princeton University Press.

※柏祐賢と西田幾多郎からの引用は、ほとんど『柏祐賢著作集』京都産業大学出版会、1985-1990年、全25巻、竹田篤司ほか編『西田幾多郎全集』岩波書店、2002-2009年版、全24巻からとっている。引用する場合、冗長であるため、本稿ではそれぞれ『著作集』巻号：ページ数、『全集』巻号：ページ数という形で出典を示した。

